

L08c **2009-14年の木星南赤道縞のHazeの光学的厚さの変化について**

浅田正 (九州国際大学)

木星の南赤道縞には攪乱という現象が時々発生する。これは直前の数カ月にこの縞が可視光で明るくなり、乱れた状態から一挙に暗くなる現象である。この現象のメカニズムを知るにはこの縞の雲頂高度の情報が必要である。そのために雲の上空のHazeの光学的厚さを調べており、2010年の攪乱をはさんでのHazeの光学的厚さの年変化については、2014年春の年会で報告した。その結果は、2009年(明るくなる前)は光学的厚さが0.42、2010年(攪乱2か月前。明るい状態)は0.56、2011年(攪乱10か月後)は0.32、2012年(攪乱1年10か月後)は0.56という値であった。

2014年5月に飛騨天文台の65cm屈折望遠鏡を用いて750nmの赤外線連続光で撮像観測を行い、南赤道縞の周辺減光から0.42という値が得られた。明るくなる前の2009年の値と同じであったが、南赤道縞の雲頂高度も含めて攪乱前の通常の状態に戻りつつあることを示しているように考えられる。